

保険・年金 フォーカス

欧州保険会社が 2021 年の SFCR (ソルベンシー財務状況報告書) を公表 (5) —SFCR からの具体的内容の抜粋報告(その4)—

保険研究部 研究理事 中村 亮一
TEL: (03)3512-1777 E-mail: nryoichi@nli-research.co.jp

1—はじめに

欧州の保険会社各社が 4 月から 5 月にかけて公表した単体及びグループベースの SFCR (Solvency and Financial Condition Report : ソルベンシー財務状況報告書) については、これまでのレポートで、[長期保証措置と移行措置の適用による影響](#)及び [SCR と MCR の計算方法の説明](#)、[内部モデルの使用状況及び \(内部モデル適用による影響が大きい\) 分散効果の状況](#)について報告した。

今回のレポートでは、使用された内部モデルに関する説明等について報告する (内部モデルに関する説明のうち、「標準式と内部モデルの差異」のリスクカテゴリ毎の具体的な説明については、次回のレポートで報告する)。

2—使用された内部モデルに関する説明

1 | 使用された内部モデルについての説明項目

SFCR においては、「E.資本管理 (Capital Management)」の中の「E.4 Differences between the standard formula and any internal model used (標準式と使用された内部モデルの差異)」等において、内部モデルについての説明が求められる。

具体的には、各社によっても若干異なる部分もあるが、概ね以下の内容が説明されている。

「E.4.1.内部モデルの使用・目的」

「E.4.2.内部モデルの範囲」

「E.4.3.内部モデルの計算」

「E.4.4.標準式と内部モデルの差異」

「E.4.5.内部モデルで使用されたデータ」

これらの項目についての説明に費やされているページ数については、欧州大手保険グループ 5 社について、次ページの図表の通りとなっている。

なお、会社によっては、「E.2. SCR (ソルベンシー資本要件) と MCR (最低資本要件)」の中で、

内部モデルの範囲等について説明しているケースもあるので、「E.4 標準式と使用された内部モデルの差異」の分量だけでは、内部モデルに関する記述量を必ずしも適切に比較できないことには注意が必要となる。さらには、各ページの記述方式や記述量も異なっており、図表等を使用しているケースもあるので、ページ数はあくまでも参考数値という位置付けになる。

いずれにしても、記述量や記述箇所等に若干の差異はあるものの、各社ほぼ同じような内容をカバーしている。また、2020年と比較すると、各社とも、新たな追加の記述を行ったり、毎年の特殊要因による記述の削除等を行ったりしてきているが、基本的には大きな変更は行われていない。

内部モデルに関する記述量

	AXA	Allianz	Generali	Aviva	Aegon
E.資本管理	16ページ	22ページ	17ページ	13ページ	23ページ
E4.標準式と内部モデルの差異	3ページ	6ページ	3ページ	4ページ	2ページ

上記の項目のうち、「E.4.2.内部モデルの範囲」と「E.4.3.内部モデルの計算」については、[前回のレポート](#)の「**2—内部モデルの使用状況及び分散効果の状況**」及び[前々回のレポート](#)の「**2—SCRとMCRの計算方法の説明**」の中で一部報告している。また、「E.4.4.標準式と内部モデルの差異」のリスクカテゴリ毎の具体的な内容については、次回のレポートで報告する。

以下の章では、「E.4.1.内部モデルの使用・目的」と「E.4.5.内部モデルで使用されたデータ」及び「E.4.3.内部モデルの計算」のうちの方法論・アプローチの記述内容について、それぞれの項目に関する記述が充実している等の特色のある保険グループを項目ごとに2~3社選択して、報告する。

2 | 内部モデルの使用・目的

ここでは、Aviva、Allianz 及び Aegon の説明について報告する。

(1) Aviva

Aviva は、内部モデルの使用に関して、以下のように記述しており、「内部モデルは、Aviva 全体の日々のリスク管理及びビジネス上の意思決定に使用される。」として、「上級管理職、取締役会、株主及び格付機関へのリスクベースの業績報告、リスクと財務力の報告において、内部及び外部で使用される。」と述べている。

E.4.1 Aviva の事業における内部モデルの使用

内部モデルは、グループ全体及び法人レベルで、重要なビジネスプロセス及び活動への情報提供を通じて、Aviva 全体の日々のリスク管理及びビジネス上の意思決定に使用される。

「使用」とは、モデルが直接的にビジネスを実行するために使用されることを意味するのではなく、その限界を認識し、リスク管理フレームワークの他の要素とバランスをとりつつ、内部モデルのアウトプットとモデル自体が、意思決定を支援するために使用されることを意味している。

内部モデルの主な目的は、内部モデル法人及びグループ全体のソルベンシーIIに基づく規制上の報告に必要な資本メトリックスを計算することにある。モデルのアウトプットは、上級管理職、取締役会、株主及び格付機関へのリスクベースの業績報告、リスクと財務力の報告において、内部及び外部で使用される。

内部モデルによって生成される詳細なメトリックスは、グループ全体の戦略を設定し、以下を含む

一連のその他の活動をサポートするためにも使用される。

- ・戦略と事業計画：法人間で資本を配分し、リスク調整後収益を測定し、リスク選好度を事業計画サイクルの一部に設定する。
- ・価格設定：内部モデルで計算された様々なタイプの商品をサポートするために必要な資本水準を評価することによって、価格設定と商品設計を改善する。
- ・取引：余剰資本への影響による潜在的買収や事業投資の妥当性を評価する。
- ・再保険：潜在的に不利なシナリオをモデル化することにより、望ましくないリスク・エクスポージャーを緩和するための目標とされる再保険契約の必要性を特定する。
- ・資産及び負債管理：投資戦略を推進するための市場変動の資産及び負債への影響を測定する。

内部モデルが Aviva のリスク管理システムに完全に統合されている方法の詳細は、B.3.3 項に記載されている。

(2) Allianz

Allianz は、内部モデルと経営でのリスク管理プロセス等との関係について、「Allianz の配当政策の中心的要素は、内部モデルに基づくソルベンシー II の資本化と関連している。これにより、我々はソルベンシー II の枠組みに基づくリスクステアリングや資本化に関する統合的な考え方が可能になる。」として、「内部モデルは Allianz のビジネスステアリングに完全に統合されており、その適用はソルベンシー II の下でのいわゆる『使用テスト (Use Test)』を満たしている。」と述べている。

B.3.4 リスク管理プロセス

B.3.4.1. リスクベースのステアリング及びリスク管理 (抜粋)

2016 年 1 月 1 日以降、ソルベンシー II が当グループに関連する規制制度であるため、当社のリスクプロファイルは当社の承認済みソルベンシー II 内部モデルに基づいて測定及び管理されている。当グループは、ソルベンシー II に従って、当グループ及び関連会社の両方のレベルで、アドホックシナリオ、ヒストリカル及びリバースストレステストならびに感応度分析により補完された、事前定義されたストレスシナリオに基づいて、目標ソルベンシー比率の範囲を導入した。

さらに、Allianz の配当政策の中心的要素は、内部モデルに基づくソルベンシー II の資本化と関連している。これにより、我々はソルベンシー II の枠組みに基づくリスクステアリングや資本化に関する統合的な考え方を確保できる。

Allianz は、シナリオ分析で補完された内部モデルに基づいたリスクとリターンの包括的な考え方を使用して、ポートフォリオをステアリングしている。リスクと集中は我々の内部モデルに基づく限度によって積極的に制限され、リスク資本リターン (RoRC) の包括的な分析を行っている。RoRC は、商品の全期間にわたる資本コミットメントを反映して、持続可能なベースでの収益性の高い新契約と商品ラインを識別することを可能にする新契約指標であり、資本配分決定の重要な基準である。

結果として、内部モデルは Allianz のビジネスステアリングに完全に統合されており、その適用はソルベンシー II の下でのいわゆる「使用テスト (Use Test)」要件を満たしている。

B.3.4.2. リスク資本計算の範囲（抜粋）

リスク・エクスポージャー

以下のセクションで我々のリスク管理プロセスを構成する3つの大きく定義された要素に関するさらなる詳細を提供しているが、これらは我々がさらされている重要な全てのリスクカテゴリを統合的に取り扱っている。

リスク管理プロセスの重要な要素と Allianz グループがさらされているリスクカテゴリとの関係

Risk category	Internal model	Top Risk Assessment	Specific risk management process
Market risk	•	•	•
Credit risk	•	•	•
Underwriting risk	•	•	•
Business risk	•	•	•
Operational risk	•	•	•
Reputational risk		•	•
Liquidity risk		•	•
Strategic risk		•	

(3) Aegon

Aegon は、内部モデルの目的に関して、以下のように記載している。

内部モデルの目的は、SCR に Aegon の実際のリスクプロファイルをよりよく反映させることである。そのため、Aegon の最も重要なリスクタイプは、ソルベンシー II PIM（部分内部モデル）の一部として内部モデルでカバーされているが、あまり重要でないリスクタイプ及び事業単位はソルベンシー II PIM の一部として標準式でカバーされている。

さらに、以下のように追加の目的を述べている。

Aegon がソルベンシー II PIM を使用するその他の目的は次の通りである。

- 適切な資本バッファを設定するためのリスク・エクスポージャーの定量化
- 記載されたリスク選好度及びリスク許容度に対するこれらのエクスポージャーの監視
- 資本コストが全体的なコストに大きな影響を与える場合の商品の価格設定
- 販売された新契約の価値、特にそこに含まれるオプション及び保証の価値の評価
- 資本要件、配当方針及び危機管理計画の予算作成

3 | 内部モデルで使用されたデータ

内部モデルで使用されたデータについては、各社とも説明を行っているが、ここでは、Generali、Aviva 及び Aegon の説明について報告する。

(1) Generali

Generali は、内部モデルで使用されたデータについて「PIM（部分内部モデル）で使用されたデータの品質は、『グループデータ品質ポリシー』で定義されたプロセスに基づいて認められる。」として、「この方針の中で、グループは比例性及び重要性の原則に基づいて範囲内のデータを定義し、正確性、完全性及び妥当性を検証することを目的とした統制を通じてデータの品質を評価する。」と述べている。

E.4.3. 内部モデルで使用された方法

PIM で使用されたデータ

SCR 計算の目的で、PIM は、市場の証拠とビジネスドライバーの両方を共同で検討するために、市場のデータ（主に資産の特徴に関係するもの）、会計データ、統計ポートフォリオのデータに依存している。この情報は、グループの自己資本の PIM 確率モデルの包括的なデータセットを提供する。

PIM で使用されたデータの品質は、「グループデータ品質ポリシー」で定義されたプロセスに基づいて認められる。この方針の中で、グループは比例性及び重要性原則に基づいて範囲内のデータを定義し、正確性、完全性及び妥当性を検証することを目的とした統制を通じてデータの品質を評価する。

PIM の SCR 計算は、グループ内部モデル検証ポリシーで定義された原則に基づいて、セクション B に記述されているように、独立した検証プロセスの対象となる。

(2) Aviva

Aviva は、内部モデルで使用されたデータについて、他社に比べて詳しく説明しており、「会計データ（IFRS）」、「契約データ」、「オペレーショナルリスク・データ」、「金融市場データ」、「内部資産データ」、「その他のデータ」といったデータの種類毎に説明を行っている。

さらに、「Aviva のソルベンシー II データガバナンスビジネス基準は、データを SCR 計算に使用する前に、適切性、完全性、正確性及び一貫性の観点から、データの質を評価するために使用される管理環境及び基準を設定している。」と述べている。

E.4.3.2 内部モデルで使用されたデータ

グループの内部モデルで使用された重要なデータは次の通り。

- 会計データ（IFRS）－資産と負債のソルベンシー II 評価は、IFRS 測定が非経済的なベースであることを除けば、IFRS と整合的であることが求められる。ソルベンシー II 貸借対照表においては、殆どの金融投資や一定の非技術的負債は IFRS ベースで計上される。
- 契約データ － これには、保有契約や過去の契約の請求を含む。
- オペレーショナルリスク・データ－ グループは、(Aviva 固有の) 内部の損失経験データと、ORIC（オペレーショナルリスク保険コンソーシアム）によって提供される業界のオペレーショナルリスクの損失に関する外部データベースで保有されるデータの組み合わせを使用する。
- 金融市場データ － グループの市場リスクと信用リスクの較正プロセスは、外部金融市場資産デー

タ（FTSE インデックスリターン等）をしばしば使用する。

- ・内部資産データ – 基礎となるソルベンシーⅡ貸借対照表の評価は、資産の時価評価及び一定の非取引資産のモデル評価に依存している。使用されるデータは会計処理から取られるため、殆どのデータは「会計データ」の要素の下に含まれる。
- ・その他のデータ – 上記の5つのカテゴリに該当しないデータ。これには、ソルベンシーⅡ制度の下での必要経済資本と数的、国勢調査又は分類情報を含むが質的情報は含まない技術的準備金の計算に使用される全てのデータ（資産データを含む）が含まれる可能性がある。

Aviva のソルベンシーⅡデータガバナンスビジネス基準は、データを SCR 計算に使用する前に、適切性、完全性、正確性及び一貫性の観点から、データの質を評価するために使用される管理環境及び基準を設定している。

(3) Aegon

Aegon は、データの品質に関して、「ソルベンシーⅡ報告プロセスのために、必要なデータディレクトリと、それぞれのデータの完全性、正確性、妥当性に関する基準の説明を含む、グループ全体のデータ品質ポリシーを実施している。」と述べている。

データ品質

Aegon は、ソルベンシーⅡ報告プロセスのために、必要なデータディレクトリと、それぞれのデータの完全性、正確性、妥当性に関する基準の説明を含む、グループ全体のデータ品質ポリシーを実施している。内部モデルで使用されるデータは、以下のように、内部及び外部の情報源に由来している。

- ・個々の保険契約の特性及び補償範囲を詳述した契約データ
- ・資産のポートフォリオを指定するデータ。例えば、資産の種類、金額及び満期日
- ・国民死亡率表や取引されている有価証券の価格などの外部情報源からのデータ

内部モデル設計は、モデル設計と実行の段階で、利用可能な全てのデータを最適に活用することを目的としている。データ使用の適切性の評価は、モデル検証プロセスの一部を構成する。

4 | 内部モデルの方法論・アプローチ

内部モデルで使用された方法論・アプローチについても、各社とも説明を行っているが、ここでは、Allianz と Aviva の説明について報告する。

(1) Allianz

Allianz は、5社のうち、「E.4.標準式と使用された内部モデルの差異」に6ページと最もページ数を費やしている。そのうちの内部モデルのアプローチに関する記述は、以下の通りとなっている。

(1-1) 内部モデルの範囲と使用法及び基礎となる方法論

Allianz の場合、まずは、「E.4.1 内部モデルの範囲と使用法」を説明した後、「E.4.2 内部モデルの基礎となる方法論」において、「内部リスクモデルは、モンテカルロ・シミュレーションを用いたバリューアットリスク (VaR) アプローチに基づいている。」こと、さらに「99.5%の信頼水準」でリスク

資本が計算される、ことを説明している。

最後に、内部モデルと標準式によるリスクカテゴリの構造の差異を図表で示している。

この図表からわかるように、リスクカテゴリ自体も必ずしも標準式に準じているわけではない。

Allianz の内部モデルでは、市場、信用、生命保険引受、損害保険の保険料及び準備金、ビジネス、オペレーショナルの 6 つのリスクカテゴリに分類している。

E.4 標準式と使用された内部モデルの差異

このセクションでは、内部モデルの範囲と使用法、その基礎となる方法論と集計手順を説明し、内部モデルと標準式の差異の概要で締めくくっている。

E.4.1 内部モデルの範囲と使用法

内部モデルとその説明の対象となるビジネスユニットについては、付録の QRT S.32.01.22 を参照のこと。内部モデルによってカバーされるリスクカテゴリは、「C.リスクプロファイル」の章で提示され、説明されている。内部モデルの範囲はまた「B.3.4.2 定量化可能なリスクに対する内部リスク資本モデル」のセクションで説明されている。

内部モデルは、我々のリスク管理フレームワークの中心にある。それは、Allianz グループの定量化可能なリスクを測定し、資本管理、特に、グループの配当政策、のような領域において我々の事業を操舵し、全ての事業活動に対するリスク資本上のリターンを測定するために使用される。Allianz グループの内部モデルの様々な用途については、「B.3.4.1 リスクベースのステアリング及びリスク管理」を参照されたい。

E.4.2 内部モデルの基礎となる方法論

当社の内部モデルは、モンテカルロ・シミュレーションを用いたバリューアットリスク (VaR) アプローチに基づいている。リスク計算は、市場価値のバランスシートから始まり、各資産と負債のポジションに関連するリスク要因及び関連するリスクカテゴリに帰属させる。例えば、債券の価格は、(とりわけ) それぞれのリスクフリーの金利曲線と信用スプレッド曲線に起因している。その結果、それは、金利、信用スプレッド又は通貨リスクならびに信用リスクカテゴリのようなそれぞれの市場リスクカテゴリでカバーされる。

リスク資本は、各リスク要素の基礎となる共同配賦前提に基づいて、予想される期間にわたる資産及び負債の経済的正味公正価値の変動として定義される。より具体的には、当社は、特定の期間（「保有期間」、1年）及び発生確率（「信頼水準」、99.5%）内でのモデルの範囲における当社の事業ポートフォリオ価値の最大損失を決定する。リスク資本は、全ての資産と負債が、全てのリスク要素のシミュレートされた実現に基づいた各シナリオにおいて再評価される場合のシミュレートされた損益分布から計算される。

可能であれば、分布が、市場データ又は当社独自の内部的な過去データに対して、例えば保険数理上の前提を設定する上で較正される。加えて、保険業界、監督当局、アクチュアリー会からの提言を検討する。

内部モデルには、リスクタイプに細分化できる一連のリスクカテゴリが含まれる。これらの2つの

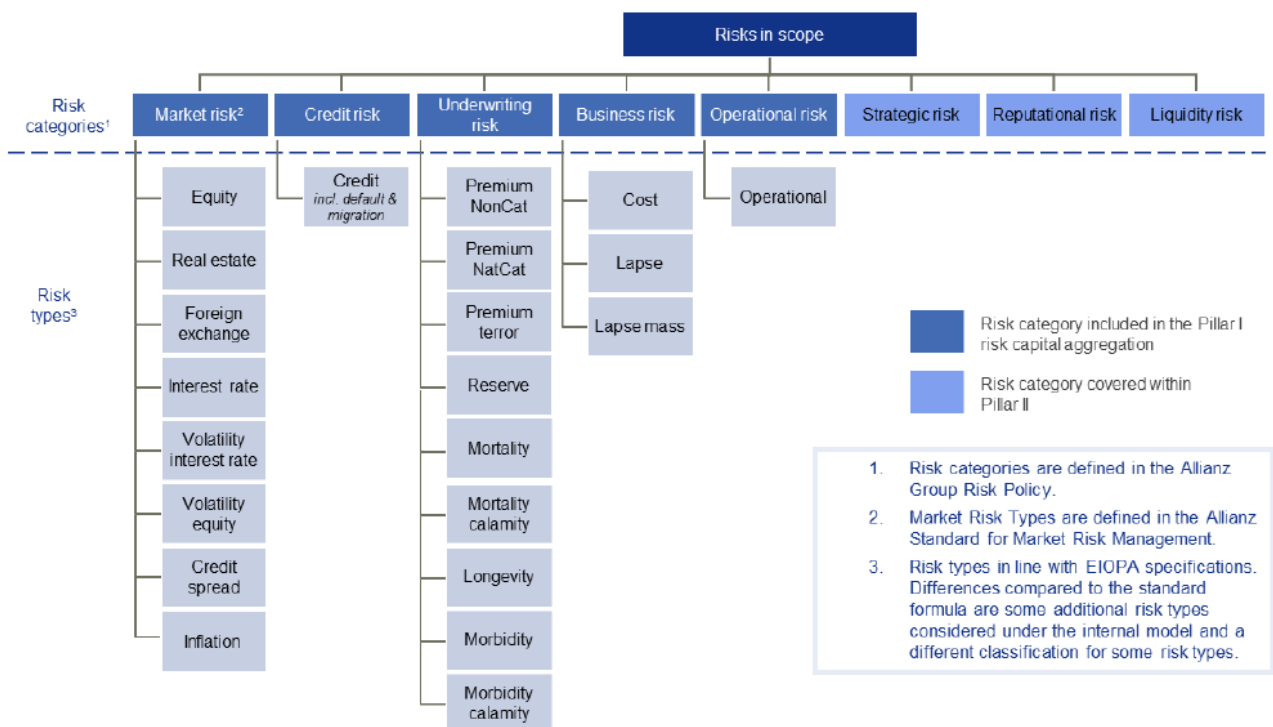
レベルのそれぞれについて、内部モデルは、単独ベースで、即ち他のリスクタイプ又はカテゴリへの分散化の前に、リスク数値を提供するが、分散化も考慮に入れて集計レベルで提供する（「E.4.3 集計及び資本追加」と呼ばれる）。それぞれのリスクカテゴリの詳細な説明は、「C.リスクプロファイル」の章にある。

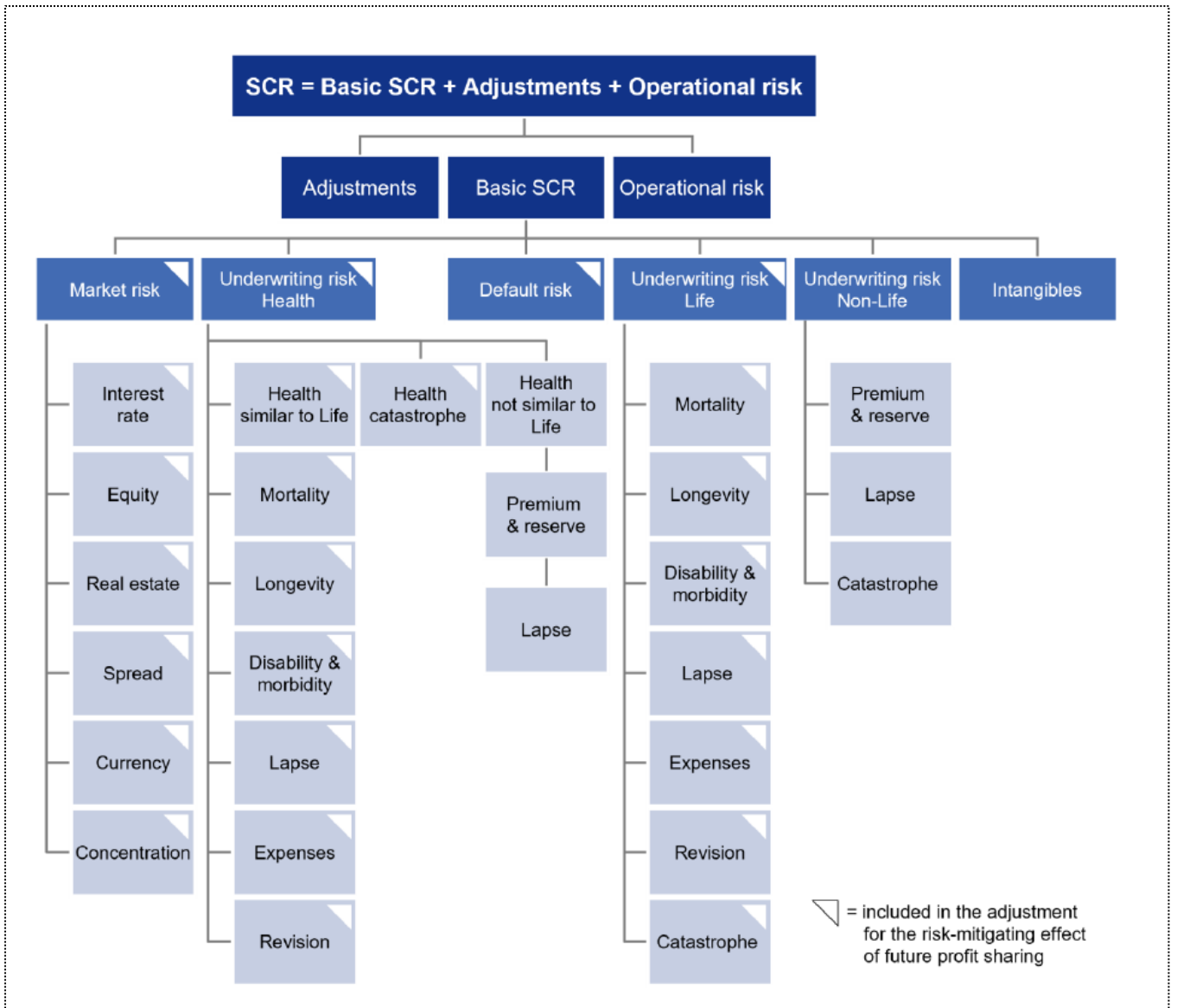
技術的準備金の評価については、リスクフリー金利曲線の上にボラティリティ調整（VA）が適用される（「D.2.2.5 評価に使用される方法及び前提」の項を参照）。VAにはクレジットスプレッドから派生しているため、クレジットスプレッドのシミュレートされた変化は、概念的には、リスク計算の各基礎シナリオにおけるボラティリティ調整の変化も意味している。その結果、これらの変化は、リスク資本にそれらを反映させるために、それぞれの基礎となるシナリオにおける技術的準備金の評価について予想され、考慮される可能性がある。したがって、内部モデルにはこの影響をカバーするための動的コンポーネントが含まれている。動的コンポーネントをモデル化するための Allianz のアプローチは、標準的に適用される静的な EIOPA VA 概念とは方法論的に異なっている。リスク資本の計算において、当社は自社のポートフォリオの信用スプレッドの変動に基づく VA の動的な変動の影響を反映している。この資産サイドの影響は、資産及び負債のデュレーションを使用して、負債サイドに移転される。EIOPA VA 方法論に関する偏差を説明するために、Allianz は動的ボラティリティ調整のためにより保守的な減額された適用比率を適用する。アプローチの適切性と保守性を検証するために定期的な検証が行われる。

Allianz は定例及びアドホックベースで引受けリスク及び（パラメトリックストレスとして知られ、以前に議論した）市場リスクに対していくつかのストレステストを行っている。

引受けリスクに関するショックは、10年に1回の非市場リスク事象を特定化し、それらの Allianz グループへの対応する影響を算出することでシミュレートされる。

以下の2つの図は、内部モデルに含まれるリスクカテゴリと、比較のために、標準式の構造を示している。





(1-2)集計及び資本追加

リスクの集計については、ガウス型コピュラに基づく業界標準のアプローチを使用している。相関行列は、コピュラによってモデル化されたリスク間の相互依存性を定義する。可能であれば、10年超にわたる四半期観測を考慮して、過去の市場データを用いて、市場リスクの各ペアについて相関パラメータを導出する。

「内部モデル資本バッファ」と呼ばれる他の効果が様々な理由により考慮される。

内部モデルの範囲に含まれない会社については、保険会社の場合、標準モデルに基づいている。米国子会社等は、第三国同等性原則に基づいて、それぞれのローカル資本要件に基づいている。非保険会社は、銀行や資産運用会社などのそれぞれのセクターの資本要件で含まれる。

なお、Allianz グループは、グループとローカルの SCR 算出の両方において、唯一つの内部モデルを適用している。

E.4.3 集計及び資本追加

リスクを集計するために、ガウス型コンピュータに基づく業界標準アプローチを使用する。相関行列は、コンピュータによってモデル化されたリスク間の相互依存性を定義する。可能であれば、10年超にわたる四半期観測を考慮して、過去の市場データを用いて、市場リスクの各ペアについて相関パラメータを導出する。過去の市場データ又はその他のポートフォリオ固有の観察が不十分または利用できない場合、相関は明確なグループ全体のプロセスに従って設定される。これは、リスクとビジネスの専門家の専門知識を組み合わせた専用の社内委員会である「相関設定委員会」によって行われる。相関は一般に、相関が参照する要因の全分布間の依存関係を反映するように設定される。全分布間の依存関係を記述する相関関係は、テールにおける特に強い依存関係（即ち、極端な事象）が想定される場合には、係数によって増加する。十分な品質のデータが利用可能である場合は常に、経験的証拠を使用して専門家の判断を支援する。

「C.リスクプロファイル」の章の分散化セクションで記述されているように、分散化は、異なるリスクはお互いに完全には従属しておらず、必ずしも全てのリスクが同時に実現するわけではないという事実によってもたらされる。これは、内部モデルの相関によって反映される。標準モデルがリスクカテゴリの内部や間を考慮しているのに対して、内部モデルはモデル化された全てのリスクドライバのペアの間の相関を考慮している。それゆえ、内部モデルの分散化効果は標準モデルよりも大きい。追加的な詳細は、以下のセクションで提供される。グループの分散化効果に関するさらなる情報については、「C.リスクプロファイル」を参照のこと。

分散リスク資本を決定するために、前のセクションで説明した方法論を適用して、リスクの同時発生に基づいて 200 年間のイベントの経済価値の変化が計算される。「内部モデル資本バッファー」と呼ばれる他の効果が、ポートフォリオの質の複製によるリスク資本の潜在的な過小評価、クロス効果を含むバッファーの重要な複数回使用、またはリングフェンスファンドによる分散の喪失などのような、様々な理由で考慮される。ローカルの事業体レベルで、又は特定のモデル構成要素の特定の欠陥に対して、追加のアドオンが適用されることがある。

さらなる資本要件が、内部モデルの範囲に含まれない会社について考慮される。保険会社の場合、これらの要件は標準モデルに基づいている。第三国同等性原則の下で考慮されている会社（主に Allianz Life Insurance Company of North America）については、それぞれのローカル資本要件に基づいている。非保険会社は、銀行や資産運用会社などのそれぞれのセクターの資本要件で含まれる。内部モデルを適用しないこれらの追加的な資本要件は、ファクターベースアプローチに基づいて、グループのソルベンシーⅡ資本要件に集計される。ファクターベースアプローチはグループに対する分散化効果が適切に考慮されることを確実にする。

Allianz グループは、グループとローカルの SCR 算出の両方において、唯一つの内部モデルを適用している。ローカルのモデル構成要素が使用できる。しかしながら、ローカルのモデル構成要素とそれらの較正の責任はローカル会社にあり、構成要素はグループのレビューと確認の対象となる。

(2) Aviva

Aviva は、内部モデルの計算のプロセスについて、

リスクの特定→リスク発生確率の決定→リスクの財務上の影響を決定→同時に他のリスクが発生する確率を決定→リスク間の相互作用を考慮→資本要件分布を準備するために多重リスクシミュレーションを使用→資本要件

という図を作成して説明している。

また、「Aviva の内部モデルを使用すると、テールや経験分布のあるものを含め、どの統計分布をリスク要因（死亡率、金利、信用リスクなど）の表現に使用するかを柔軟に決定できる。較正は、標準的に暗黙的に示されているように、リスクが正規分布（または類似分布）に従うと仮定することに限定されない。」と説明している。

E.4.3 内部モデルの計算

E.4.3.1 使用されている方法

内部モデルの目的は、Aviva がさらされているリスクを識別し、適切に較正された入力を使用してこれらのリスクをモデル化し、それらを集計して SCR を計算することである。内部モデルは、規制要件に準拠して、SCR を直接導き出すことができる（すなわち SCR が 99.5 パーセンタイルである）1 年間の期間にわたる基本自己資本の変動の総計分布を生成する。

当社のアプローチの概要は以下の通り。

内部モデルアプローチ

リスクの特定→リスク発生確率の決定→リスクの財務上の影響を決定→同時に他のリスクが発生する確率を決定→リスク間の相互作用を考慮→資本要件分布を準備するために多重リスクシミュレーションを使用→資本要件

Aviva の内部モデルを使用すると、ヘヴィーテールで（裾が重く）経験的な分布のあるものを含め、どの統計分布をリスク要因（死亡率、金利、信用リスクなど）の表現に使用するかを柔軟に決定できる。較正は、標準的に暗黙的に示されているように、リスクが正規分布（または類似分布）に従うと仮定することに限定されない。この柔軟性は、Aviva にとって最も重要なリスクの動作を正確にモデル化するために重要である。

リスク要因の大部分については、統計分布は利用可能な関連データに直接当てはまる。ただし、損害保険責任リスク、信用リスク、オペレーショナルリスクなど、一部のリスクタイプについては、分布はさらなるモデリングプロセスから導き出される。このアプローチは、これらのリスクタイプの重要性と、リスクの行動が正確に反映されることを確実にしたいという要望の両方を考えると適切である。

較正が適切であり、内部モデルの出力が妥当であることを確認するために、広範囲のテスト及びレビュープロセスが実行される。これらは、ボトムアップでのモデリングプロセスで使用される重要な前提の検証と、較正と損失関数のテスト（つまり、貸借対照表上の資産と負債の評価のための資産及び負債管理モデルでの計算の代用として使用される数式）から、トップダウンのストレステスト及びシナリオテスト、損益帰属のテストまで範囲が及んでいる。

Aviva は、ビジネスの様々な構成要素に対するソルベンシー資本要件を計算するために、内部モデルと標準式アプローチの組み合わせを使用して定義された、グループ全体にわたる部分内部モデルの実施を選択した。これらの要素は、一般的にリスクではなく、法人又は個別の事業ブロックである（詳細は上記の E.4.2 に記載されている）。内部モデル資本の計算を標準式の計算と統合するために、部分内部モデルの手法 2（委任法の付属書 XVIII に記述されているように）が使用される。

5 | 単体ベースとグループベースにおける内部モデルの差異

単体ベースとグループベースとで SCR を算出する際に同じ内部モデルが使用されているとは限らない。ここでは、両者の差異に関する Generali の説明内容について報告する。

なお、2020 年までは AXA も「個々の会社レベルで使用された内部モデルと、グループのソルベンシー資本要件の計算に使用された内部モデルとの主な違い」について、英国の監督当局である健全性規制機構（PRA）のスタンスによるものとして、①AXA Insurance UK plc では、「動的ボラティリティ調整」の使用が認められない、②年金負債の評価で、AXA Insurance UK plc 及び AXA PPP healthcare Ltd の単体 SCR 計算の社債スプレッドの動きに対して、50%のヘアカットが適用される、の 2 点を挙げていたが、2021 年の SFCR においては、「ソルベンシー II 規制に従う個々の会社レベルで使用される内部モデルと AXA グループの SCR の計算に使用される内部モデルの間に差異は存在していない」と説明している。

Generali は、「法人レベルでの SCR の計算には異なるアプローチが適用される」として、「ローカルに特定の較正に関して、イタリアの会社については、グループ・レベル及び他の PIM 事業体の計算とは異なって、イタリア政府債務へのストレスや確率論的ボラティリティ調整は適用されない。」と述べている。これは、イタリアの保険監督当局の IVASS のスタンス等を反映したものとなっている。

E.4.3.内部モデルで使用された方法

法人レベルでの SCR の計算には異なるアプローチが適用される

IM の使用は、グループ・レベルでの SCR の計算と、IM 範囲内のエンティティの SCR の計算の両方に対して承認されている。ただし、スイスの法人である Generali Assurances Générales SA と Generali Personenversicherungen SA は、ローカルレベルで引き続き SST（スイス・ソルベンシー・テスト）の資本要件を使用し、スペインの法人 Generali España SA de Seguros y Reaseguros と CajamarVida SA de Seguros y Reaseguros は、ローカルレベルで引き続き標準式を使用している。この目的のために、ローカル適合性評価は、モデルと較正が範囲内の会社に対しても適切なままであることを認めている。ローカルに特有の較正に関しては、イタリアの会社の計算については、グループ・レベル及び他の IM 事業体とは異なって、イタリア政府債へのストレスや確率論的ボラティリティ調整は適用されないことに留意が必要になる。

3—まとめ

今回のレポートでは、欧州大手保険グループ各社の SFCR（含む QRTs（定量的報告テンプレート））

から、使用された内部モデルに関する説明について報告した。

各社とも基本的には 2020 年の SFCR における記述をベースにしているが、必要に応じて、内容についての若干の見直しを行い、一部充実等を図っている。

これまでの 5 回のレポートで、2021 年の SFCR に関しての具体的内容を報告してきた。

次回の基礎研レポートでは、これまでのレポートを総括する形で、各社の内部モデルの適用状況に関して、標準式と使用された内部モデルのリスクカテゴリ毎の差異の説明等の内容について報告する。

以 上